

駅前路地

ずっと昔だが、ここではよく
ディーゼルパイルハンマの音が響いていた
夏の暑さの厳しさを増幅するような音が

駅前に次々と生え、立ち並ぶビルに
人々はぞろぞろと出入りしていた
それこそが日々の楽しみであったから

私は現在というものを認識していない
波のようにゆるやかに起伏する社会そのものは
何も変わってはいない、と考えている

あらゆる事物が年老いているように見えるが
使役されるだけの毎日にそっぽを向いた若者が
その中にぼつぼつと店を構え始めていた

打ち捨てられた巣を再利用するかのように
そこで静かに、つましい幸福を温めている
かつて、多くの人々がそうであったように

手っ取り早い再生を創造と呼び
複雑怪奇な社会にしがみつきながら
透明なヴェールの上からそれを塗りつぶそうとする――

もはや天から私達への賜り物は枯渇した
今や退化の中に幸福を見出すときが来たのだ
その技を探さねばならない

私は現在というものを認識していない

またひとつ

閉ざされたシャッターが開かれようとしている

(2011.7.9)